經濟論叢

第八十三巻　第四號

労働問題と社会政策……岸本英太郎　1

ヒルファディング創業利得説の批判序説(二)
……岡部利良　24

科学的管理法の分析について……小野寺孝一　50

林業労働の存在形態(三)……林業労働研究班　59

書　評

Sheldon, Charles D., *The Rise of the Merchant Class in Tokugawa Japan 1600—1868*, N. Y., 1958
……堀江保蔵　75

昭和三十四年四月

京都大學經濟學會

《書　評》

Sheldon, Charles D.;
The Rise of the Merchant Class in Tokugawa Japan 1600–1868, N. Y., 1958.

堀江保蔵

一

著者シェルダン君がフルブライト奨学生として来日し、十カ月の予定で京都大学大学院に籍を置いたのは、一九五三年の初秋であった。研究のテーマは「江戸時代における町人階級の抬頭について」であり、その目的は、商業の発達ならびに商人の抬頭に関する一つの型を得ようとするにあった。けだし、同君によれば、鎖国下の日本はいわば試験管の中の状態と見なすことができるからである。もう一つの目的は、この研究の成果を学位論文として提出したいということであった。

すでにカリフォルニア大学において、ブラウン教授の指導の下に、相当深く日本史を研究しており、また日本語を読むことも話すことも堪能な同君を迎えて、私は同君に対してできるだけのことをしたいと思った。しかし、間もなく私は、経済学部長に選ばれて、ほとんど研究室を空けることになったため、同君の研究について、全く何もなしえなかったことは、今もって遺憾に堪えないところである。

その償いの意味で、本書の内容を紹介する前に、同君のことを二、三書かせてもらうと、まず第一は、その歴史家としての研究態度である。英語で書かれた日本歴史書に広く眼を通していることは、いうまでもないとして、日本語の文献についても、著書・論文はもちろん、「日本経済大典」のような資料も、必要な限り、これをおろそかにしなかったことである。「必要な限り」という意味は、駆け出しの日本人学者のそれとは少し異なる。すなわち例えば、農民の階層分化ならば階層分化だけに限って、それ以外には目もふれないというのと違って、町人階級の抬頭という以上、その周辺、例えば文化・教育の点にまで目をつけるという有様で、いわば文化史的方法に徹するという同君の研究態度、これが、私が挙げたい第一点である。こんなことがあった。同君が京大在籍中に、博士候補者たるために残された一つの筆記試験が行われた。私がその管理者となったわけであるが、送られてきた問題をみると、その一題は、たしか「ヨーロッパ史に関する十二の著書を挙げて、簡単にその内容を記せ」というのであった。「これあるかな」と、私は感心もしたり、教えられたりもしたものである。

第三の点は、同君が、渉猟した著書・論文・資料について、必要な個所を、英訳しながら、一つ一つカードに書き抜いたことである。これは、そのまま、物を書く場合、話をする場合の材料に供せられる仕組みであった。これはアメリカ学者のふつうのやり方なのだろうが、私がこのようなやり方に直かに接したのは、これがはじめてであった。

以上のようにしてまとめられた論文は、五四年の夏にタイプ原稿として完成した。私は、当然の義務として、直ちに一通り目を通した。江戸時代の特殊な用語の意味について、二、三カ所訂正を求めたが、論文の内容については、書直しの必要を認めなかった。そして間もなくカリフォルニア大学へ学位請求論文として提出された。それが無事通過したことを告げ知らされた私は、江戸時代の日本を外国人にもっとよく理解してもらいたいという念願から、この論文が、他日、活字になることを希望していた次第であるが、いまその希望が実現し、アジア研究学会のモノグラフの一冊として、本書が出版されたことは、欣快に堪えないところである。

二

本書は九章から成る。第一章、「寛永の鎖国令に至る歴史的背景と展開」。ここでは、商人の抬頭を可能ならしめた政治的・社会的・経済的諸事情を述べる。第二章、「江戸時代初期の商人階級の社会的・政治的地位」。ここでは、商人が社会的に認められず、政治的勢力を持ちえなかったことが、逆に彼らに経済力を持たせる結果になったことを説く。その経済力を安固に維持するために、彼らの間に仕組まれた商取引に関する諸習慣や仲間その他諸組織を述べたのが、第三章、「安全を求めて」であって、第四章では、「商業および利貸資本の蓄積」について、要領よく述べられており、第五章、「元禄時代の幸福な社会」においては、以上のようにして自己安全性を確立した商人の力、暮し方、物の考え方が、当時の文化・社会に及ぼした影響を説いている。

第六章、「幕政の行詰り」は、享保から天保に至る間の、封建的支配力と町人金力との隆替を、いわゆる三大改革ならびにその間にはさまれた田沼時代、化政時代のそれぞれに着目して検討したものであって、封建的支配力が商人の金力によって徐徐に打崩されてゆく過程を、動く姿において興味深く描いている。第七章は、当時の学者（町人学者を含む）の商業観・商人観を見ることによって、商人の金力が封建制度を動揺させつつあったことをいっそう明らかにしようとしたものである。その金力とは、要するに都市（主として大阪・江戸）の商人の金力であるが、他方、その間に、彼等の組織に対抗するものとして地方商人が抬頭してきたことを、富山売薬行商人、近江商人、日田商人、加賀の銭屋などについて説明しているのが、第八章

「都市商人への新しい挑戦」である。第九章は「結論」で、ここでは、商人階級の抬頭が日本の文化・社会・経済に対して持つところの意義が要領よく述べられている。

三

以上のように分説された本書の内容を、その特徴的な点について、もう一度書き直すと、つぎのようになる。

（一）商人は、室町時代末に、はじめて階級として成熟し、政治的・経済的な力を獲得したのであるが、鎖国によってそのエネルギーの捌け口を国内商業に限られるとともに、封建制度に対して危険物とならぬよう、ないし有用な道具であるように取扱われたため、彼らは逆に、武士によりかかりつつ、また武士の気付かないうちに、商業および金融の制度を自らの手で作り上げ、自己の経験から、商慣習や商業道徳を築きあげ、もってその経済力を貯えていった。

（二）経済力を貯えることができた主な道は武士階級との取引であり、この点でヨーロッパ中世の商人階級抬頭の事情と趣きを異にするが、武士の側からみても、商人の重要性は高まる一方であった。しかも武士階級が商人に対して依然たる態度をとり、経済制度をもとのままで維持しようとしたのについては、武士の官僚的無気力、儒教の社会構造論と併せて、彼らが商人社会へ飛込むには、その仕組みがあまりに複雑になっていたことを挙げねばならない。

（三）土地経済と貨幣経済との矛盾という言葉がよく使われるが、武士と商人とが互いに他を必要としたという意味で、この言葉をそのまま受取ることはできない。むしろ、「不安な共存」(uneasy co-existence)、すなわち共存する二者の力のアンバランスと理解すべきである。

（四）町人階級の抬頭が広く文化・社会に及ぼした影響を軽視してはならない。とくに学問の面において、都市が国学発達の地盤となったこと、都市の発達において西洋の自然科学を受容れる態度が整えられたことを注意すべきである。ことに後者については、自然の理を説いて、自然の克服または利用を説かなかった朱子学の中へ、自然科学の精神を織込んだことは、支那と比べて日本の重要な特色であるが、その西洋自然科学の受入れ態勢がある程度整えられたのは、新しいヒューマニズムおよびリアリズムを含む都市文化の発達の賜物であった。

（五）江戸時代後期になって、商人と武士の相互依存関係から、ひいていろいろの意味での身分の混淆が生じ、そこからさらに、明治維新後、重要な産業家が武士の間から輩出するという結果が生じた。身分の混淆は、理論的にいえば、忠誠と奉仕および家父長的恩恵という封建的関係に置きかえるに、売買の関係を以てするということであって、それが享保以降徐々に進行したことは、明治の改革者たちに、封建的政治制度を廃棄し

資本主義を奨励せしめる上に、測るべからざる価値をもった。

（一八）明治維新の変革は武士によって行われたし、維新後の実業家も多く武士の間から輩出した。したがって、商人の力は或いは軽視されるかも知れないが、変革運動に積極的だった地方商人のことを考えると、そこには軽視されえないものがある。すなわち、江戸時代初期の商人が持っていた才能と進取の気性は、中ごろたるんだとはいえ、決して死滅せず、後期の地方商人の中に活気を取戻したのを看取することができる。

四

以上のように、本書は、江戸時代における商人抬頭の姿を、時代の流れに添うて生き生きと描くとともに、商人の活動の積極面と併せて消極面についても釣合いのとれた評価を行い、また、経済ばかりでなく、文化各方面に及ぼした商人および商業の影響を考察し、もつて、商人階級抬頭の全歴史的な意義を把握しようとしたものである。封建社会から資本主義社会への歴史的発展の主たる担い手を農村および農民に求めようとするわが学界の風潮からすれば、本書におけるような問題の取上げ方は、或いは、かえりみるに値しないかも知れない。けれども、町人にも武士にも同様に大きな役割を認める立場からすれば、商人および都市の持つ意義は、依然高く評価しなければならないし、ことに、先に掲げた諸点は、本書に述べられている以上に、われわれ自身でさらに検討を進めるべきであろう。

なお本書には、ていねいな脚註が施されているばかりでなく、巻末に人名一覧表、註釈附き用語一覧表、参考文献（和文・欧文）一覧表、および索引を載せ、研究書としての体裁がよく整っていることを附記し、最後に、いま国務省に勤務する著者の健康を祈りたい。（一〇六頁）